

〔論 説〕

## 社会交変換論Ⅷ

### —幹マーケティングの展望—

長谷川 博

諸泰斗の批判等に直接間接に応答したロールズ<sup>(1)</sup>は普遍化主義の「正義」論——ただし正義とは“justice”の訳出成立事情で広まった語——から著しく後退した、といわれた。それは、普遍一般（未規定）領域から政治という個別特殊（被規定）領域をもちだし「2階」に昇り、その[逃げ]場での「テクノロジー—スキル論」になった嫌いを、[2次化のないHIが遠慮会釈なく]鋭く衝いたことである。よって本論では、7変項等（C原情報メディアからなる派生的メディア）の何をもちだそうとも2階化するのとは別に、2次（DC）化することに拘ってきた。それは、「自然—社会科学」/「矛盾なく論理階型を上げる無限化のような有限化—恰も矛盾があるようでも論理階型を上げない有限化のような無限化」におけるインフォデミック（不確かな情報の大量拡散爆発）に引きつけられるものであることへの眺めを、パターン認識上でもつためである。また、虚々実々な「実践—理論」<sub>2</sub>でのCCという曲がりなりにとも真摯な意図をもつコンステレーションとは、地上（地平や地表）の眺めや宇宙の眺めに絶えず中立であろうとするが幹専門的視点でしか描くことができない「星座の眺め」をいう語用上の能記であった。「アトミズム—ホーリズム」<sub>2</sub>の世界内存在には、記憶ともつかない記憶である遺伝子情報に匹敵し決して拭い去れない専門（○大学やゼミ等での授かりを一介に思うにつける専門）がある。されど、標準制度的な「学問の自由」後の自由がなくその当人たちに個体化がなければ、車の前に飛び出す当たり屋のリリースを助長するだけに過ぎなかったと挑発できる。だからこそ、自然科学について実証主義とは別の見方をすることによる自然主義の新たな可能性と、社会科学についても解釈学とは別の見方をすることによるその固有性の新たな可能性が考究されたのである<sup>(2)</sup>。

いかなる場合でも、「推論（『演繹—帰納』）—直観」/「妥当—非妥当」のすべては、「真または偽、真かつ偽、真でも偽でもない」という個別特殊化での許容範囲内評価か、さもなければ普遍一般である。であるから、「[拡張] 現実—反現実」/「真[正の事] 実—虚構——たとえば演劇はこれに過ぎないのか——」/「直接—間接」/「対面—非対面」/「増—減」におけるインフォデミックと依存経路不明化の振り幅に一石を投じようとするほど、人新世の7変項ごとでの「経験（「相関—接触」）—思弁」に致し方なく波紋を広げる<sup>(3)</sup>。については、「科（狭義では自然科学だが、ここでは単に「区分」）—学（構築されて

(1) J. ロールズ/矢島欽次ほか訳、1979年。以上への批判に対する以下での応答のこと。J. ロールズ/E. ケリー編/田中成明ほか訳、2004年、75～86、99～105、158～167、210～237、293～313頁。

(2) G. シモンドン/藤井千佳世監訳、2018年。近年では以上がいう。

(3) 石田英敬・吉見俊哉・M. フェザーストーン編、2015年、1～10頁、13～44頁、95～131頁。以上のメディア論には、概念フィルター・バブルへの以上なりの立ち向かいがある。

いるその区分にある「化」からの自由、その区分の脱構築という「化×」への自由、そしてその区分による再構築という自由)／「存在論寄りの技－認識論寄りの術」における「問いを解く－その問いを問う」ための「数理／弁証」は、「有－無機体」／「記号の統語／意味／語用」によるコミュニケーション－記号に依らないエネルギーの「穴だけ残し食らうか穴を食らうか」において、包摂論的批判実在論的に再会して、どう再開できるのか。以上のことを、本論の題目に込めたのである。

世界に2つの半分の対構造に対する3パターン(「在－不在」化、「在－暗在」化、同時前面化)の動化という相(解)には、7変項等の諸領域において、「理性－感情」を「合理－非合理」／「適応価の高－低」からいう件に、「個人<sub>2</sub>－社会<sub>2</sub>」／「社会<sub>2</sub>－自然<sub>2</sub>」／「自然<sub>2</sub>－個人<sub>2</sub>」における「チョイス<sub>2</sub>－セレクション<sub>2</sub>」の証左としてある「モノ(もの)／コト(こと)」がむしろ見えなくなったままであるから、それらに共通の全体であるトランスベクション(供給連鎖というよりは「市場－非市場」の連鎖)が見えなくなったことが洗い渡おとされて久しい。既述の限りではあったが、物(「モノ－もの」)自体(そのもの)の存在論を諦めたが認識論的にはイギリス経験論と大陸合理論を超え、文化は異質化しても数学や自然科学ではそうなりにくいという共通性に着目して「感性(直観)と悟性(推論・知性)からのアプリアリな総合判断」としての客観<sup>(4)</sup>がいわれれば、いやそれはそれでも問主観であるから「客観／主観」を相関主義的に語用せずに済む能記としての「接触」<sup>(5)</sup>が存在論的に語用されているとは述べた。そこで、見えなくならないように、コレクティブイズムやコネクショニズムやデュオ・マイニングによる「共時－通時」／「他の概念による規定が要－不要」／「実体－実在」からの幹存在への接近を、「スペクトラム－ソライティーズ(sorites)」<sub>2</sub>／「コンフィギュレーション－コンステレーション」<sub>2</sub>におけるCC化として変項を再定式(SLMS<sup>(6)</sup>)化していくことになり、標準「制度／管理」以後<sup>(7)</sup>のトランスベクション上のマーケティング組織個体行為についても、展望上予期する限りの課題解決を再開していく。

## 第1節 穴だけ残し食すのか穴を食すのかの一環

つぎのこと、そのつぎのことにかかわり、実践と理論の苦難(「日常－非日常」／「過去－未来」)／「深謀遠慮－深慮遠謀」における「FOL－SOL」／「宙吊りになっている－いない)を改めて目の当たりにすることが意外にあった。まず、つぎのこととは、以下のことである<sup>(8)</sup>。①理論は実践に背を向け、実践はその背を追う(実証主義)ということ。②実践において実証されるかどうか真であることの判断基準になり、理論は実践に沿って己を方向づける(プラグマティズム)ということ。そして③理論と実践の相対優位からの共重合に更に対するかのようにして、より善いものや目的に適うという点で有用(無用)なもの

(4) I. カント／篠田英雄訳、1964年。

(5) H. ドレイファス・Ch. テイラー／村田純一監訳、2016年。以上など関連諸論には拙稿VIで既述。

(6) Floride, L., 2004, pp. 219-253.

(7) Jackson, M. C., 2003. たとえば以上を念頭している。

(8) W. ベンヤミン／浅井健二郎編訳、2014(1921, 27, 29, 30, 38, 39)年, 526～641頁。以上を踏まえる。

をあっさりと取（捨）せず、「理論－実践」の社会的美化を渋々引き受けることになる時空点の状況に拘るものの、その美化と実在が一致することの実証自身が、歴史過程において妨げられ中断させられたりすることがあるひとつの過程になっている（批判理論）ということ、である。また、そのつぎのこととは、「技－術」について問い「形式－内容」<sub>2</sub>にあるC<sub>2</sub>的な縫れに対峙すれば、我々の記号は実体を代行的に再現したものだと考えたアリストテレス以降の古典的な現前記号学を経て、しつこくいえば、つぎが「科－学」認識になっているということである。①読み聞きするバイナリー・コード化された2項が、社会科学では0か1かにはまらずもって収まらないということ。②反証が同時に存在し真実性を確立しがたい命題だとされてきたアポリアでも、「反証可能性がない」とは必ずしも証明できない場合に相当するならば、これにむしろ果敢に挑めばいいということ。そして③標準「制度／管理」以後の「数理／弁証」では、かねてのリバタリアニズムとリベラリズムの論争が「アナーキズム－リヴァイアサン」<sub>2</sub>／「国家独占資本<sup>(9)</sup>－資本独占国家」<sub>2</sub>のうちのC<sub>1</sub>的論争から抜け出すために、各々の両極の固定に忠実だとすればそのようなスペクトラム（線形）上で踵を返す脱構築だけでなく、それを非固定化するソライティーズ——非線形といえるループからの螺旋へと——上での脱構築も必要になるということである。たとえば「個人的－社会的性差」<sub>2</sub>／「遺伝子－非遺伝子決定」<sub>2</sub>を見事に言及するならば、このようなLGBTQ論（Cダイバーシティ論）は、スペクトラム化論に収まらないソライティーズ化論の好個の例となるはずである。

C<sub>2</sub>（1.5元論）では、さまざまな文脈上での通りのよさからAとBについて「～の[中の]～、～なる～、～の～化、～と～の区別のなさ（無記）」などと言ひ分け回すことへの蟠りから生じる解釈の混線を押さえ込む必要が、それはある。というのは、論理上差し当たったの2次化II（「A－B－C」<sub>2</sub>）からでる3つの2次化I（「A－B」<sub>2</sub>、「B－C」<sub>2</sub>、「C－A」<sub>2</sub>における12カテゴリ）での「離散－収斂」への、既述の「メレオロジー－メログラフィー」／「テレオノミー－テレオロジー」／「歴史被規定性－未来被規定性」の貫入が、「ルビコン川（時代を昇っての『ライン川』などの川）を渡る判断」だと、「回顧／展望」的にいわれてきたと考えられるからである。しかしながら、幾度もあったそれら判断妥当性の敵は、「持続－可能」<sub>2</sub>におけるCC的強化のなさであったのではないかとはいっても、これは、つぎを受け止めることがなければ所詮無理からぬことである。①「PかつPでないと信じること」（拙稿VI）についていえば、自然科学においてならば「P」に相対論を入れれば「Pでない」に量子論が入ってくるといふ論理のなさが社会科学においてもあること。②化学における原子の電子配置モデルにおける閉殻についての、「スペクトラム－ソライティーズ化」を考えても分る「マイクロ（マクロ）からマクロ（マイクロ）にある高階型化抑止的な包被論的理解の足りなさ。このことは、社会科学的には中間レベルの設け損ねにはね返る。そして③C<sub>1</sub>的発想下にある例えば「ラグビーでいうノーサイド」からだけでは決して生成しない「遺伝子－非遺伝子決定」／「個人（アトミズム）－集合体（ホーリズム）主義」に対するネオ共進化としての発生論的共生。これらを7変項ごとにまずは考えつづけければ、「自由」を保障するリバタリアニズム<sup>(10)</sup>の「矛／盾」とは何かという鍵

(9) 大内力, 1970年。以上も参看されたい。

(10) R. ノージック／嶋津格訳, 1985, 1989年。

穴——政治的変項上では軍事（「戦争<sub>2</sub>-平和<sub>2</sub>」/「統治<sub>2</sub>-自治<sub>2</sub>」）が、どこをどう入れ替えてもディレンマとパラドクスが残るこれまでの「幹」だとされてきた——への鍵を見つけ合う脱構築的再変項化による再構築的選択になる。

唯物論と唯心論<sup>(11)</sup>から発火する「回顧／展望的」な慧眼間での対立も、それはあった。そして、その経緯に対し科学的合理主義がいわれた<sup>(12)</sup>。後述する図3は、これをふまえた上でのものである。ただし、その後にも一方で、唯物史観の発展的継承<sup>(13)</sup>にも唯心史観から生じた「構築-構成主義」論争にも SOL があった。にもかかわらず、相互牽制的にコスト（手許と「手前／手先」での「グッズ／サービス化」のプロセスにかかる元手）を厭えば歴史照応が乏しくもなり、未来へ向かう帰結主義には変えて程遠くなる。だからこそ、そうした2論間はもとより、「ハイアラーキー-ヘテラルキー」<sub>2</sub>のネットワーク（「無階級社会」が何ほど過るかがある脱欧米入亜ありなしのヘテラルキー）間などの「代替<sub>2</sub>-補完<sub>2</sub>」の関係が、既に7変項のいたるところで言われながら、燻る感があるのは実にもどかしい。このことを追撃し本論では、人間の人間たる所以（「遺伝子決定-非決定」における人間らしさ）を縮減する役にしか立たないところの機能主義が偶さかにいう機能との対照化を念頭し、そういう機能分化の基にある系統樹発想を越えた[ネオ]共進化（発生論的共生）を対照化したわけである。前者は、さまざまに制度化する生系上の権益網を「圧倒する-しない」/「利権網-ソーシャル・ネットワーク」での「公式／非公式」な多中心化認識（考系）にある局在的な「妥当性／批否性」の力を[ポスト・ホックにも]及ぼす。だからこそ、後者については、前者から有にもなり無にもなる空[核]——空をいうのは0元論だと言えよう——を擁する、相互作用（「縁起」）における非寛容にも言及した。

実に、チャンク（HI が AI に強化される以前で通常に言われてきた「 $7 \pm 2$ 」の数）を超えてなされた選択諸変項のマトリクス化を見て取ったかのようにして、相関係数が0ではないところにある「縁起」を抑え込み伝えきれていない「概念／コード」が紛れ込んでいることを指して、マルチコがあるといわれてきた。であるから、もはや言語（C記号）をそれこそ明らかに超えた「抽象-具体対応」が既述7変項ごとに希求された限界に直面させられてきたという嫌いも、脳の狭義言語能力領野をフル回転させようが遺伝子情報を再現表出しきれていないばかりか脳情報にも振り回されているので必定である。だからこそ、後述するが、人為組織の対内対外における信頼の必須条件が言われた。それでも、空という能記に諸文化圏で分岐的定義（所期）があったのは、上記チャンクでいえば $8 \times 8$ （このときのセル数は64）になるマトリクス化の表頭表側行列に再参入する行列を1つでも増やせば、 $9 \times 9$ （このときのセル数は81）を超えた $16 \times 16$ （このときのセル数は256）になり、少なくとも、 $175 (= 256 - 81)$ のセルが、この段階で有無を言わず論理上出現してくる数の空のうちだった。と、単純化しておくのは、「コネクショニズム-シンボリズム」における「非言語-言語」/「反省-再帰」/「競争-協働（「労働」）」上で発生論的

(11) L. フォイエルバッハ／船山信一訳、1955年。

(12) E. デュルケーム／菊谷和宏訳、2018年。ホブズヤルソー、自然法理論家や経済学者から、コントヤスペンサーを断じつつC<sub>2</sub>的結論に至ったがCCがなかった、のは功利主義者やウェバーも同様である。

(13) E. M. ウッド／石堂清倫監訳／森川辰文訳、1999年。

に意義をもつこれからの「主要な移行（CC論）」の解明を誘った諸拙稿での結論から成り立つ拙稿Ⅷの論述への、責めても手の届く範囲化としてである。むろんズレは残るだろうが諸賢の思いがし（「言語依存-非依存」／「プリヘンジョニング-テキストチャライジング」／「FF-FB」）も、基本開閉論のもと本論で特に前面化した「決定論-非決定論化」／「システム-組織化」／「競覇-非競覇化」といったさまざまな2項対立（対照）への異議申し立てが分岐論以後の未分論になっていた、と受け止めてのことである。

自然科学でも決定論批判が惹起された「ラプラスの悪魔」という存在については、個体だろうが「超」組織であろうが延々とは繰り返し得ない範囲で行為する世界内存在のC<sub>1</sub>のスペクトラム化上で過去も未来もないと決定論的に登場しても、そのC<sub>2</sub>のソライティーズ化上では逆向きに相互牽制し合い「相対／反転化」するので<sup>(14)</sup>登場しなくなった。換言すれば、「専門-教養」／「分析-総合」／「中心-周縁」から切り取って、どちらもこっちは見たいものを見るだけとはならぬよう、マーケティング・アズ・コンステレーション（コンステレーショナル・マーケティング）として記述することによる文理非分な取捨では、絶えずの以後論であるCC論がでる。これが「形式論<sub>2</sub>-内容論<sub>2</sub>」となるのは宿運（宿命<sub>2</sub>-運命<sub>2</sub>）だが、「システム-組織」／「還元-創発特性」についての「大なるパターン認識論」（「存在はあってない-認識はなくてある」ということからの「1-2（多）元論」／「0-1.5元論」）が、ここをいっとう越えるのかとはなるだろう。

「我は〈多〉（すべての「多」）を思うゆえに我あり」と、嘘偽りなく好悪を廃除してどこまでか行き、さては何らかの「原因-理由」で空を実装（implementation）できなかったという負債を背負い引き返してきたほどの諸賢ならば、トラスやドーナツの穴だけ残して食らう<sup>(15)</sup>ようになった以後をどう語るのか、しかなかったのである。「人文-自然-社会科学」は互いへの責めを凌ぎ合うという意味でこそこの3項動化が、実装である。ということを通り過ぎだとは、より卑近な語ですら選択し表出せざるをえない前後で、能記浮遊の甘受経験を黙しもしてきたほどのHIならば、数理上だろうが弁証上だろうが必ずしも否定しえまい。より有効な能記がない以上、今後もやはり変項定式の穴を食す——穴だけ残して食すという無理だけを決してしないためにも——ということに対峙しているという意味で「空」も語用する知見座は、次節で所論・星々（図1）をいうについてもある構えと映るだろう。

「演繹-帰納的」、「抽象-具体的」、  
「個々の事実の記憶-事実間の連想網の

図1 コンステレーショナル・マーケティング：  
「DC/CC」-「3点動化/ソライティーズ化」



〈注〉現象論的な「実存」と構造論的な「幹存在」を分断しない解釈を要する。

(14) 一ノ瀬正樹，2006年，114～175頁。

(15) 大阪大学ショセキカプロジェクト，2019年。

記憶]、「一般観念-特殊観念的」、「認識-情動的」、「分析-全体的」、「理性-直観的」、「知識に強い-価値に敏感」、「繰り返しが得意-創造が得意」という対照においてAIは前者的でありHIは後者的だといひ、ソーティング、後期哺乳動物的頭脳レベルの記憶、演繹、算術（論理計算、数値計算）だけでなく、生命の分子レベルの記憶、帰納、パターン認識<sup>(16)</sup>、言語（いつも完全には分離できない認識言語と情動言語、理論言語と実践言語、非日常言語と日常言語）行為についてもHI化するの強いAIだといわれていた<sup>(17)</sup>と考える。両極（A $\supset$ 「正」と非A $\supset$ 「反」）を不可欠とする対構造には、個人的経験におけるいろいろな要素から出来上がったネットワーク中の連想網（ $\supset$ 感情を媒介にしたイメージ網）を代表した言葉<sup>(18)</sup>なしには記述できない例えばつぎがある。①組織個体における行為の「遅滞/終端付加」を継起した両立化——「デジャヴ（既視感）-ジャメヴ（未視感）/「あり-なし」のクオリア（主観的「質/量」感）と、ナッジも包摂するものとしての「スティグマジー-アフォーダンス」/「コヒーレント（せり出しなし）-デコヒーレント（せり出しあり）」のデクステリティにどのくらい頓着するのかで行為（ $\supset$ HI）論にも程がある——、②相補的な「前景（在）-後景（暗在）化」——旧知の“intel inside”の表示化や“alexa inside”の訴求化、5G段階のスマホ等の中国製製品に米国が25%関税を課せばその日本製部品の輸出に波及するなどはトランスベクション上での後景の前景化である——、そして③社会進化として選択的な篩がかかるようになってきたところの近代史上でも体制の「生み親（構築者、プロパガンダー?）-落とし子（維持者）」による大きなストーリー化やナラティブ化。

これら3つの各々で生じる差違とそれら間で生じる差異（「内<sub>2</sub>-外<sub>2</sub>」のちがひ）として、社会科学的な「[[螺旋的]合]である態様 { $\supset$ 「認識<sub>2</sub>-存在<sub>2</sub>」である「[[マクロ-ミクロ]（[極]大小）の粒度」/「上下（南北）の緯度」/「左右（東西）の経度」上の[層的な]「中間カテゴリ」ごとの最頻値（モード）}のちがひが生じる。また、間主体性行為の全体性には、多変項クロス集計のつぎから生じると説明できる全体性の強弱がある。①廃棄不可能な信念対立（対照）がある対角線セル間、②その信念対立（対照）に廃棄可能なズレがみえる対角線直近傍セル間。よって、FOL的な通常のSLMS化においてすら、外部に審級（法に基づく超自我、ルールとしての法、道理、公理）があるためのディレンマや、内部に審級（法に先立つ超自我、精神としての法）があるためパラドクス——網かけありと網かけなしのセルのいずれがいずれであるのかの反転を理解する必要がある（拙稿Ⅶ図6-4）——そのものを否定しているわけではない。「主権とは、法権利が生を参照し、法権利自体を宙吊りにすることによって生を法権利に包含する場としての、原初的な構造のことである<sup>(19)</sup>」というが、この主権の論理には、「ディレンマ-パラドクス」<sub>2</sub>におけるCCがあると見做せる。

また、適応論者といえども、賢者とは適応度（生物進化的には自己複製能力、社会進化論など社会科学的には再生産 $\subset$ 再変換の能力）が高い者であり、愚者とはそれが低い者

(16) ベイズ統計の立場からパターン認識をいうものには以下がある。Bishop, C. M., 2006.

(17) 渡辺慧, 1978年, 158~191頁。以上に基づく。

(18) 渡辺慧, 同上書。

(19) G. アガンベン/高桑知己訳, 2003年, 44頁。

であると、真っ先にいっただけでは済まなかった。賢者、愚者を決める基準は、是認感情を排去できないことや、「短期－長期性」にも左右される追求目標が異なれば合理的だとも非合理的だとも言えなくなり一致しないわけである。合理性と感情をスペクトラムの両極に据える論としては類似諸論よりも高く評価できるものがあるが<sup>(20)</sup>、本論の考え方はこれに止まらない。なにせ、アートでさえ知性でみるものだとまでいい感情は知性的行為を阻止するという否定的見方だけでなく、知性的行為に不可欠な場合もあるという肯定的見方がドミナントになる場合も事実あると考えれば、「行為－制度」の本質問題（マルチレベルな「チョイス－セレクション」に時間軸を入れた4大説総合以後）に貢献するはずである。肯定的見方もしていたスミスの頃に用いられたセンチメントという語<sup>(21)</sup>にすら、その原義を余所に否定的意味合いが付されるようになっていたため、その原義とほぼ同義ながら、いまでは他のいくつかの語も専門的に使われている。以上のことは、賢者は知よりも情に従うといい、理性（正しさと間違いの区別を指示する道徳性の源泉である純粹理性、真理と虚偽の区別を指示する倫理性の源泉である実践理性）とは相容れない（2次化できない）ものだからこそ、感情を謳歌しようとするロマン主義への回帰をC<sub>1</sub>的というわけではない。また、ほぼすべての感情が社会文化的な影響下で個々人に後生的に習得されると仮定する社会構成主義への終始でもない。感情の肯定的見方では、つぎをいうのである<sup>(22)</sup>。①感情がもつ非合理性ゆえの適応価（行為の適応を〔節約的に〕支えているということ）、②感情が固有にもつ合理性（「感情的知性」）ゆえの適応価、そして③5感情報を通じて過去経験が呼び覚まされる際の感情の適応価。

## 第2節 定式（SLMS）化の再開

数理と弁証のDC・2次化（C<sub>1</sub>的対立における数理と弁証、C<sub>2</sub>的対照における数理と弁証）から、左々右（右々左）、上々下（下々上）、過々未（未々過）によって成る内々外（外々内）をいう批判実在論的包披論を基本開閉論と認めるCCを経て、日本からのマーケティング論を「『構造－解釈－現象』の日本における3点動化」からいって聞く耳の揃うときがきたと思えてならない。C<sub>2</sub>的対照の産物ではなくC<sub>1</sub>的対立の「数理／弁証」的産物であったからこそ『第3項』は排除される、といわれたとしての再考を進めてきたのであり更に進めていく。こうして、そこに言われていた第3項に相当する物事——後述する「モノ－コト」／「もの－こと」であろうとも——を、専門のおかげで考えつづける。このことを阻害する構造（制度）[論]は無用の長物だが、あなた由来ではないあなたと私由来ではない私とが、「何も言えない」ところから先ずは再会したいものである。

そういったところの専門においてより卑近にも兎角に「対立／対照」へと破れていくことのすべてが、C<sub>1</sub>的にどこまでいけるかといって終局するしかなくなった1元論か2元論か多元論かにおいて再会することから、またも元の本阿弥になること、への不寛容が妥当ではないというならば、一体全体どういわれるのかを拝聴したいながら、それが叶わず

(20) Y. エルスター／染谷昌義訳、2008年、15～60頁。

(21) A. スミス／高哲男訳、2013（1790）年。

(22) 藤田和生編、2007年、京都大学学術出版会。以上に基づく。

とも自己批判はしていく。「対立／対照」項ごとの相互作用子（自己触媒的に増殖する浮動子、複製子としての能力には限界がある遺伝子に対する文化子、そして情報処理において階層的に生じる軌みとしての感情子）は、

「認識論的境界－存在論的穴」(コ「標準制度／管理」) を出入りする「錠前(錠穴・錠と鍵)子」である。そして、そのつど新しい「思弁／経験」を数次的な非遺伝子的記憶(理論知と行為知)へと組み込み再考するとき、複数の統合中心からの対話において「線形－非線形」を内包した「ホロン－クリナメン－プラトール」の3点動化が再帰的循環を糾うであろうが、何があったのであろうとも、無形の社会基盤である選択螺旋(図2)の再開になる。生命選択と自然選択の中間レベル設定における科(区分)の仕方がこれだけだというのではないが、同図の「個体」とは、本論の専門的には「個ないし個人」／「組織個[体]ないし組織」である。文化選択<sup>(23)</sup>(「垂直－水平－斜行的」な文化伝達経路のうち、伝わりやすさから「複製／変異」の残りやすさに選択の篩がかかること)によって、遺伝子の[突然]変異に相当する相互作用を行わない個体学習(試行錯誤)としての個体選択に対する社会学習(相互作用下でのモデリング)としての「市場／社会選択」にある情報もつれは増加する傾向にあり、生命選択や自然選択に非適応的(遺伝子の利己性に反し子孫を増やさないなど)な「個体／文化選択」は、またかと思うほどの「市場－社会」問題になっている。進化の4駆動力(自然選択、[突然]変異、遺伝的浮動、移住)は「それぞれ独立につまりは同時に作用する」——ダーウィンの謎解き——が、個体進化(小進化)と社会進化(大進化)の関係は、後述するドゥオーキン流の倫理道徳論とパラレルである。だからこそ、「遺伝子－文化」共進化では、相互間での「非適応的選択<sub>2</sub>－適応的選択<sub>2</sub>」をいうことになる。

ただし、思弁的な constructivism と関係的経験的な constructionism があること<sup>(24)</sup>の両方からどういふかも考えてきたのであり、拙稿Ⅶの補遺の面を記しもする。が、以下の第1から第3の各項は、なお図1の所論についてソライティーズ化の域に入り、「4大説総合以後／共同体論」、「場の閉殻論／コンセプト化論」、そして「資源資本主義論／3層化論」に3点(項)動化の脈絡をつけた本論最後尾の展望車両である。後述するが相対矛盾に帰すディスカバリの寛容論とエンカウンタ的な寛容論からの、不寛容論については、選挙などの選択[制度]について行動経済学が示唆的であるものの、これまでの国際関係において、日本近隣文化圏の「0元論－1.5言論」が足りていない説明力になってきたのは仕方がなかったで済むのかと考えている。

#### 第1項 4大説総合以後と共同体論

個人と社会の連関を言っただけには収まり切らない4大説(デュルケム、功利主義、ウェーバー、バーガー&ルックマン)が、ソーシャル・マーケティングとソサイエタル・マーケティングの分岐のもとになった。ここから、マーケティングにとっても、共同体論

図2 選択螺旋

	人 為	自 然
内 部	個体選択	生命選択
外 部	市場／社会選択	自然選択

(23) Cavalli-Sforza, L. L., and M. W. Feldman, 1981. 以上に基づく。

(24) K. J. ガーゲン／東村知子訳, 2004年, 334～348頁。

は理論的对象として重要である。先の分岐の往時には、伝わり切っていなかった場合があったのかもしれない4大説総合論（バスカー）<sup>(25)</sup>があったのだが、さらには形態生成論的接近試論（アーチャー）<sup>(26)</sup>も登場した（図3）。しかしながらも、「内部-外部」（「上向-下向」／「左向-右向」／「後向-前向」）の複数性論からのCC論による補完ができるとは、他日を期して考えるところである。なお、意識論にかかわるが、同図における $t_2$ と $t_3$ の境目にある $t_2$ と $t_4$ が $t_1'$ になることは同じだとして時間軸が入るのだとの理解は、これに尽きるほど重要なことである。

また、選択螺旋における諸選択のどのモデルであっても、つぎの分離への問題解決をいうモデルであれば、互いの盲点を衝いてはきた。①「マテリアル-非マテリアル主義」。たとえば人間の労働はいつでもどこでも富の基本源泉だというものの、余暇や楽しみを犠

図3 4大説と4大説総合以後

$t_1$	$t_2$	$t_3$	$t_4(t_1')$
A: 先行する構造(制度)		C: 後行する構造(制度)	
B: 過程(行為)の相互作用についてのFOL 構造(制度)が過程(行為)になるという還元論 構造(制度)の条件づけとして、BはAで説明できる		過程(行為)が構造(制度)になるという還元論 過程(行為)の維持/形態生成として、CはBで説明できる	
Bにおける研究対象 集合体主義 先駆論者と方法論 <b>デュルケムの経験論</b>		Bにおける研究対象 個人主義 先駆論者と方法論 <b>功利主義の経験論、ウェバーの新カント派論</b>	
D: 構造(制度)と過程(行為)には階層性の中で相対性がある			
Dにおける研究対象 上記の伝統モデル 先駆論者と方法論 <b>バーガー&amp;ルックマンの上記伝統モデルの統合的な社会構成論</b>			
Dにおける研究対象 弁証法的関連づけの失敗、ギデンスの構造2重性論 先駆論者と方法論 <b>バスカーの批判實在論的転態論</b>			
E: 時間軸を前面化し上記Dのソライティーズ化により「マイクロ-マクロ」 <sub>2</sub> ／「組織-システム」 <sub>2</sub> をいう			
Eにおける研究対象 ギデンスの構造2重性論、バスカーの批判實在論的転態論 先駆論者と方法論 <b>アーチャーの形態発生論(社会文化的相互行為の分析的2元論)</b>			

(25) Bhaskar, R., 2015 (1979), pp. 25-79.

(26) Archer, M. S. 1995, pp. 135-161.

性にした償いとして賃金を得るためという経営コストや非効用に過ぎない労働観があれば、創意による生産(変換)やサービスの提供そして自己の道徳心に従う行為において自由な労働観がある<sup>(27)</sup>。②「私たちが理解できるような仕方で彼らを最大限に理解せよ—全く異なる理解の様式というものが存在することを理解するようになれ」というように分岐する寛容の原理<sup>(28)</sup>。これらに対応しコミットメント<sup>(29)</sup>とはいっても2様になるので、後者の寛容原理に対応したコミットメントを、むしろ昨今の、エンゲージメント論にある核心的なことだといっておいてもいい。そして③エンパワーメントありの互惠、なしの相利という区分も敢えて必要な場合すらあるような広義ベネフィット(恩恵)。以上は4大説総合以後を強化するので、[中立]選択螺旋の精緻化につながる。

ともあれ、もっと近代を考えようと、没入的に透明な共同体をいおうとして、なにゆえに「明かしえない」といったのか。1(多)なる多(1)では数が多すぎ弁証にならないところを脱構築するにも、「存在論的個別—普遍」/「認識論的コード—概念」の世界内から選択している限りは、「理念的な」再構成に至らないといったのか。ともかくも、それは、「自省—帰属」/「営為—非営為(活動, 行動)」/「対話—会話」にある複数性<sup>(30)</sup>からの「普遍への希求」の現れだとしての積義がすぎである。①社会(市民社会)への「内[在/有]」という語では語られきれなかった、それらの社会から発しわれわれに生起するそれらの社会の限界(いかなる社会もが包摂しえない個)での出来事としての共同体、②「有限性の後<sup>(31)</sup>」としていまに思弁的に回帰されたが「外[在/有]」という語では語りきれられてはいない、「死のときに死ぬことができぬ自己—その自己の死が死ぬことになる他者による時間」/「他者の死の中でこそ思い知る自己の死—その死を分かち合う他者との時間」にある「プラグマティズム—非プラグマティズム」の限界(いかなる社会も個もが解体も構成もできないということが否定しえない)での出来事としての共同体。そして③対話の限界での出来事としての会話的営為としての共同体。

展開態(図4)には先行しないとされてきた面がどうもあり、4大説総合以前では、「共同体」への言及が希薄化している。「コンステレーショナル・マーケティング」を考え進めるにも、共同体(コレクティビズムを経ないとないアセンブリッジ等)を考えることでは、つぎを真っ先に再想起する。①陶冶のある段階で「自己<sub>2</sub>—他己<sub>2</sub>」な自分が覚醒し「自分が自分でなくなる」と吐露されたこと、②それを感得した自由置換視点のある者たち—たとえば、「メレオロジー/メログラフィー」の「自然—社会科学」実在論者、シンバイオシスの生物学主義者、コンビビアリティの表

図4 由としうる組織は何か

	個別/特殊	普遍/一般
個別/特殊	市民社会, 民族	市場, 国家
普遍/一般	家族, 市場	共同体

(27) E. F. シューマッハー/酒井懋訳, 1986年。

(28) H. ドレイファス・Ch. テイラー/村田純一監訳, 2016年, 174-189頁。

(29) R. H. フランク/山岸俊男監訳, 1995年。以上は、あくまで1様のコミットメントをいったが、コミットメント戦略の嚆矢である。

(30) D. ルイス/佐金武ほか訳, 2016年, 頁。

(31) Q. メイヤスー/千葉雅也ほか訳, 2016年。

出主義者、リベラルな共同体の先をいう実践的政治〔哲学〕者や心理学者——との「対話-会話」/「異化-同化」/「差異-同一」を超えた共生、そして③そこでの「肯定-否定」の作法と後述する「地<sub>1</sub>-図<sub>1</sub>」と「地<sub>2</sub>-図<sub>2</sub>」の関係における破調。それでも、こういう3点動化にあるメタ・反照的な自分（あなた）こそが、いつまでもずっと待っていたのかと思ひ知るような「内（外）なる外（内）」を人生で何度か経験することからふと我に帰り、いわば内風呂だろうと外風呂だろうと、一旦風呂に浸れば湯も身体も忘れたところにある温かさを感じつづけられ、その感情を忘れることがなければそれでいい。とはいえ、C<sub>1</sub>やC<sub>2</sub>をこえて自由になり切れず、交変換の具体的対立項を専門的に考え下すにも、後述する共同体論の再再考を伴いながら長年月を要してきたことには関係する。

本論が追究している共同体は、むろんゲマインシャフトのような「前近代の共同体」と同じではない。剩え、それが否定的に解体されたところでの個を超えた価値や権威のまわりに形成される展開態に後行する個の集合としての「世（発言）人<sup>(32)</sup>の共同体」（「近代における近代欠如の共同体」、あるいは「労働する人間を生産要素とする近代の共同体」）でもない。展開態に後行して帰属する者を、民族共同体という想像の共同体から転向したハイデガーは存在論的に「世人」と、ポランニーは認識論的に「発言人」と呼んだ。「世（発言）人の共同体」を、つぎの①と②にまず2大別化するが、それはその①や②の下位諸項目の一部ないし全部として規定できる<sup>(33)</sup>とした上で「2階」への昇りが言われた<sup>(34)</sup>のとは別に、2次化をいうためである。①自省主体——位置ある自我、負荷なき自我——、②上記①を陶冶する帰属主体——間主観的妥当の鍵としての歴史、市民（公民）共和<sup>(35)</sup>的特性としての卓越性、尊重された自治、特殊な共通了解下での分配——。ロールズは、共同体を「同一の包括的な、あるいは部分的に包括的な教説を一体となって支持する人々の集合」だとマッキンタイヤやサンデルらの共同体主義よりは薄く広くいっており、共同体における位置ある自我に対する「原初状態」からの「負荷なき自我」をいう<sup>(36)</sup>。これに対し、サンデルは、共同体を①道具的構想的、②情感的構想的、そして③構成的構想的に3区分したうえで、ロールズはその②をいうが、その③こそが共同体だといふ位置ある自我をいう<sup>(37)</sup>。ただし、その③への批判もある<sup>(38)</sup>。

学者学であろうと経営者学であろうと「理論-実践」<sub>2</sub>にある実学（実践知C暗黙知）をいうからには、一進一退の破れ（拙稿Ⅵ図5）にある「命懸けの飛躍」を、つぎのようにも思ひ知ったのであろう。つまり、一定時間がたっても十分な基準が見つからない場合、どちらの可能性も知識レベルでは等価だとなり、恣意的にそれらの対称性を破ること（雪崩現象）になる場合である。ともかく、その展開態には、大きくは、〔血縁的〕家族、民族、市場、国家と、それらの変動するたびの残余概念である市民社会がある。国家は少なくとも、それらの限定された領域を付託され担うにおいてドミナントである<sup>(39)</sup>。そして、ひ

(32) Heidegger, M., translated by J. Macquarrie and E. Robinson, 2008. M. ポランニー／高橋勇夫訳、2003年。

(33) 井上達夫、1999年、125～140頁。

(34) 井上達夫、2006年、3～27頁。

(35) R. ドゥオーキン／高橋秀治訳、1994年、116～137頁。「リベラルな共同体」の魅力を高める考察を始めた。

(36) J. ロールズ／田中成明ほか訳、2004年、24～31頁、143～148頁。

(37) M. J. サンデル／菊池理夫訳、1992年、279～288頁。

(38) 井上達夫、1999年、141～179頁。

とまずいえば、本論が追究している共同体（営為体<sup>(40)</sup>）とは、それらの展開態ごとでの最上位化する「想像の共同体<sup>(41)</sup>」でも、その特定階層にある「中間共同体」でもない。前者は、あくまでも国家ナショナリズムの解明に向かった共同体論であるが、これと同型化する共同体を、その後者や他の展開態にも見出せるとしておく。だからこそ、コレクティブイズムからの、コレクティブ、アセンブリッジ、アセンブリ<sup>(42)</sup>などの諸概念が、場の閉殻論にかかわってくるにせよ、発生論的共生をいうに至ったわけである。

なお、より社会科学的に言われる場合の「場〔所〕」については、「経験-現実-超越」／「現象-解釈-構造」の「脱」再考としてつぎを踏まえる。①「他の何かの存在を必要としない実体（実体に近い性質をもつ擬似実体も含む『実体的対象』）-変化自体があるためにこそ変化を通じて同一性がある実在（実在に近い性質も持つ擬似実在も含む『実在的対象』）」／「感覚からの知覚という意識（＝現象学的射影）-意味」。コント以後では、論理実証主義者やクワインらによる本質主義への批判により、本質への重視が根絶されたかには見えなかったが、クリプキらによる様相論により、それが一気に復活している。②「相関（中間知覚）-接触（3未満〔あるいは以上〕感覚での直接知覚）」／「あり-なし」。③「事実-反事実」／「想定内-外」に対峙する「真の」他者（CC者）——彼は素朴にいう内外には位置しない——。④ここに初めていうが「教育（そんなもんだと理解させる-思わせない）／学習（そんなもんだと思う-思わない）」の制度的中身にも及ぶ「安定-不安定」<sub>2</sub>／「マクロ-ミクロ」<sub>2</sub>の「微視-巨視化」。⑤市場、官僚制、ネットワーク。そして⑥取引当事者における後述する「組織／システム」の「ロバストネス（〔当初の与件判断が妥当な限りでの〕事業定義としての均衡点の維持化力の頑健性）-フラジリティ（その脆弱性）」にかかわる「スペクトラム化しはしない-むしろそうするアジリティ（事業定義としての〔初期値的〕均衡点への状況依存的な、あるいはその逸脱値への、鋭敏性・機動性）」。

## 第2項 場の閉殻論とコンセプト化論

現実を「過去（後向）<sub>2</sub>-未来（前向）<sub>2</sub>」／「経験<sub>2</sub>-超越<sub>2</sub>」としていう現実主義者ならば、「スペクトラム-ソライティーズ」<sub>2</sub>から、つぎを考えるだろう。「組織は場として機能できるようにになっている、組織の中には場が最低限は生成している」という実践上での謂い、換言すれば「組織はすでにして場である」という想定にはともすれば「ハイアラーキー・マネジメント」（構造的マネジメント、米国型マネジメント、スペクトラム化上での無限化域をせず評価尺度を刻み例えば100点尺度にする類のファジー論、人海戦術的な組織化を節約するための「情報」システム化への過剰依存）への偏りがあり、組織硬直化を避けそれに対置できる「場のマネジメント」とのミックス（パラドックス・パラダイムの導入）を遅らせる。ゆえに、ソライティーズ化上の無限化域での「原則のディスカバリ／法則とのエンカウンタ」もこそ追究されてきた。

(39) R. ノージック／嶋津格訳、1985年、1989年。

(40) M. オークショット／嶋津格ほか訳、1988年。コレクティブイズムとサンディカリズムもいった。

(41) B. アンダーソン／白石隆・白石さや訳、2007年。

(42) 能記が似ているので念のためいうが、以下でいう「アセンブリ」の前後にある「アセンブリッジ」を本論ではいつてきた。J. バトラー／佐藤嘉幸・清水知子訳、2018（2015）年。

「持続<sub>2</sub>－可能<sub>2</sub>」／「私共－公共」（組織の中の細部組織）は、公共を可能にする集団（組織の中の組織）に先行し、一方が一方に遅れてやってくるのが「集団の統合化－分化現象」である。少数ならば決定論者あるいは主意論者の集まりだけでなく、複雑な組織の安定性は、小さな諸部分である細部組織の中にある。組織を構成する安定的な細部組織は、われわれが考えるよりも少ない人数——最小は1対1の2だが、1対1の関係を10以上維持するのは困難——と短い時間——9分を超えると分断されることが多い——の中で意味を形成しており、その構造は単純である<sup>(43)</sup>。組織の中の組織にはシステムがあるとしても、細部組織にまでシステムがあるとは限らない。結局、この細部組織の先行を捉え続けるか、見ない（見なくなる）のかなのである。細部組織に位置した者にとっては、選択螺旋を「正－逆」／「時計回り－逆時計回り」に見なければならぬ件であり、決定（主意）論者ではないと思っている者が、いつの間にかその先行を見なくなり主意（決定）決定論者になっている件である。ここからすれば、この細部組織は他の細部組織と「ディスカバリー－エンカウンタ」的に連結されるものであるが、組織の秩序の秩序の源泉となる。その他は連結されているように見えているだけのものであるかもしれない。「権力－実力」／「信じる－信じない」における組織の内実は、ここにあるといってもいい。ともあれ、「公共」というのはすべての組織〔の中の組織〕に当てはまることではない」ということが言い訳がましく聞こえたならば、すでにそれは剣呑なのであろう。

「私」という個人の粒度をいえば、パーソンの中の複数（マルチ）なサブ・パーソンがあることによる複数のアイデンティティという多義的な非固定性がある。本論では、「アトミズム<sup>(44)</sup>－ホーリズム」にある抜き差しならない観点——「『1・絶対・還元』<sub>2</sub>－『多・相対・創発』<sub>2</sub>」——のテンションの現れといえる一元論的本質主義<sup>(45)</sup>から多元論的本質主義への分岐もあるので、相互に還元も創発もないホロン、クリナメン、プラトーの強弱変動的な3点動化を既にアイデンティティの穏健な理念とした。集合体の集合アイデンティティについても、やはり同様のことが当てはまる。すなわち、いかなる粒度（内包）の行為体の例化数（外延度）も、それらのひとつに一義的に固定化した時空内での例化に過ぎないものとなる。以上のことは確かに、目的志向的な「統一体」的行為体内（間）での〔多数派内にある〕対話的な中間共同体（組織の中の組織）間での巧妙な落としどころ（戦略的妥協、暫定協定）となってきた。さりとて、そうした繰り返しの度の残余に過ぎないならば、市民（「公民（シビック）／私民（シビル）」）社会の捉えられ方は残余としてあってなきものに等しい。よって、「市民（社会）の社会（市民）」（「市民<sub>2</sub>－社会<sub>2</sub>」）というC<sub>2</sub>の求め方としても、「利己－利他」／「エゴ－脱エゴ構造」として強調されるセルフ・エンパワーメント論——「天（者）は自らを助く者（天）を助く」というように前節でいった「個別者－超越者」についての「認識－存在論」<sub>2</sub>がかかわる——があるといえる。また、こうした、エンパワーメントについては、粒度が大な行為体についてすらそのケイパビリティについて「生得的機会の差っ引き勘定のありなし」を加味するので、[共生のための]

(43) A. ユング／遠田雄志訳、1986年。P. チェックランド／高原康彦・中野文平監訳、1985年。H. ウルリッヒ・G. J. B. プロブスト／徳安彰訳、1992年。以上に基づく。

(44) Ch. テイラー／田中智彦訳、1994年、193～215頁。

(45) K. R. ポパー／小河原誠・内田詔夫訳、1980年。

行為を、「当為-非当為」<sub>2</sub>のクラス<sub>1</sub>にある「行動」、そのクラス<sub>2</sub>にある「活動」、そしてそのいずれでもない「営為」に区分することになる。ここには当然に、「プレーポスト」/「事(真)実-事(真)実らしさ」<sup>(46)</sup>ということのキャッチボール、放逸、リカバリーがある。

そこで、つぎをいいたい。①コレクティビズムもここから派生したといえる上記の諸概念も「1(多)なる多(1)」の脚注に過ぎない契機である。結局同じではないかという者は、0元論と1元論と2元論と多元論、そして包披論——便宜的にC<sub>2</sub>や1.5元論と言いつ換えた箇所もある——というパターン認識がわかっていて、そのすべてが同じだということのかどうか。ともかく、そういわれることは、実践的にも意義がある「0元/包披論」からの行為の停滞への言い訳にしか聞こえない。②少なくとも何をどこまで言って為すかにある批判上の時計のちがいがあがる。③人間対人間にウエートを置いていう関係性の中には、無意味(有意味)なる有意味(無意味)の大半を、実はみなが共有していながら明らかにならずにいるのでいまは共有できないことが不透明感(観)につながる<sup>(47)</sup>。

今にしても灯台下暗しで想起率が低い「0元/包披論」の英知をもってして「連続<sub>2</sub>-不連続<sub>2</sub>」/「線形<sub>2</sub>-非線形<sub>2</sub>」/「1元論<sub>2</sub>-多元論<sub>2</sub>」をいい、「分かる-分からない」/「動ける-動けない」の交差におけるできる範囲での人間(「抑圧する者たち-抑圧される者たち」<sub>2</sub>)の行為(「思考(thought, thinking)上のいつどこで「こと(コト)-もの(モノ)」<sup>(48)</sup>が閉殻するのか」という論議は、分子モデルと平行であった。「連続<sub>2</sub>-不連続<sub>2</sub>」は、進化論でも常套の所期に対応している。「線形-非線形」<sub>2</sub>における所記の分岐は、さまざまな粒度の人間を乗物とし前後関係がある「経験の最中で瞬時に生じてくる行為である実践-経験に先行(後行)する行為である理論」/「システム-組織」/「新情報を入れず外挿(Cフィードフォワード)することである直観-推論に推論を重ねずといった段階で[3層化や直観に対しても]SOL化を半ば許容したことになる推論」/「数理-弁証」の埒内にあるゆえんである。そして、「1元論-多元論」<sub>2</sub>における所記の分岐からは、科学と哲学の相互包摂的対話が「共認可能-不可能」/「公共-非公共」/「上向-下向化」/「独裁-民主」が題材(問題群)となりつづけていると自覚された上でさらに前進しようとされてきた。これらのことから、CC的帰結を迎えるとの確信は未だ揺らがない。「一般化されてきている公共」がないのは底抜けに危ういが、文化自体も含め「計算量爆発以後」をいうときに、「カップリング-デ・カップリング」<sub>2</sub>における単にC<sub>1</sub>への後戻りではないCC論的な閉殻論にならないのは、非明示的ではあったが包披論といえる「原則<sub>2</sub>-法則<sub>2</sub>」が説かれていたこと<sup>(49)</sup>への理解が何故かしら乏しい場合には、対照項のいずれの側といえども1次批判となり少なくともメタ批判の欠片もないからだといわざるをえない。

ともかく、経済生活を覆えるだけ覆い尽くす今の資本主義の社会への懐疑が決して放棄されないのかと「2重螺旋-非2重螺旋」/「正-負」を考えるにつけ、つぎを考えるよう

(46) R. カーツワイル/井上健監訳, 2007年。

(47) K. J. ガーゲン・M. ガーゲン/伊藤守監訳, 2018(2004)年。対話が始まるときをいいつつも、会話による豊かさも言う。

(48) 廣松渉・丸山圭三郎, 1985年, 2~40頁。両者の持論を対照する能記だが、諸賢が承知のように、両者には袂を分かたぬ複雑系があった。

(49) 宇野弘蔵, 1964年。H. ドレイファス・Ch. テイラー/村田純一監訳, 2016年。

になった。①「 $C_1-C_2$  的」な合意形成を公共だと謳う救済があれば、敢えていうと「決定論寄りの『意思』-非決定論（主意論）寄りの『意志』」<sub>2</sub>における CC 的な意見の一致という、それこそ人為かつ自然に至極快適な事物を犠牲にする現実がある。ただし、この地上を探訪すれば、「内<sub>1</sub>-外<sub>1</sub>」を超える一般化的な公共概念のない「『内<sub>1</sub>な公共あるのみ』の共同体」が特殊歴史過程に今もってあるといわれている現実面に直面している。②によって、「理論-実践」<sub>2</sub>の「『一般/普遍化』への CC を伴う総合的コンステレーション-『個別/特殊化』からの DC を伴う分析的コンフィギュレーション」において、コレクティビズムすらが手垢（口角泡）に塗れるうちに偏向化しドグマ化してきた。そして③上記②の先で開かれ（閉ざされ）つつ閉ざす（開く）という「閉殻」の場、すなわちポジショントークにあるような「位置/役割/規範」を許さない、目下いうところではより無垢な能記であるアセンブリッジには、「行為の3次元（「行動-活動」/「意思決定-実行」/「作業-管理」）-制度（構造）の次元」からなるトランスベクション考においても、より本物とされる幹存在を意に介し永劫回帰する発生があるといった。そもそも閉殻とは、原子の電子配置をいう化学用語である。サービス・マーケティングで周知な分子モデル<sup>(50)</sup>は、その延長上にあった。その閉殻現象は、多重ループ（螺旋化⇄高階型化）にも限度があり「可疑-可謬」<sub>2</sub>（コフェティシズムや物象化錯視）を止むなしとする閾値での SOL も同時前面化するモデル化に繋がるものであったと再評価する必要がある。ただし、場の閉殻論は、善と必然の間の「境界/依存論」が欠落し、幹といえる不寛容の社会科学がなく、枝分かれしやすい寛容の社会科学ばかりとなれば、実質的には化学の援用以下に過ぎなくなっていく。

以上を踏まえるコンセプト（「道徳-倫理」<sub>2</sub>）化論では、[上]塗りたてでも古塗りのペンキでも、それを「考えてきた者-考えて来なかった者」のスペクトラム化よりはソライティーズ化にある実効性を重視するほど、不寛容のコンセプト化がともかくなされる。 $C_1$  的な自然科学論をいくら援用しても、なんでもありの寛容論になるばかりであり、「やりたいことこそをやる-そのためにこそやりたくないことをやる」のだが「その前半は自分で後半は他人だ-いやそれはなかりう」という話は出てこないからである。戦略論だけで戦術論（コタスクフォース論）がないのも、2様（定言命法、仮言命法）の規範論についての方法論が崩れたコンセプト化につながるばかりである。

さても、その決定論的思考が19世紀の悪夢だといわれたシステム論における自己組織性論の登場以後と、組織論における批判「実在-反実在」論的包披論（「認識<sub>2</sub>-存在論<sub>2</sub>」/「アトミズム<sub>2</sub>-ホーリズム<sub>2</sub>」）の登場以後を、その狭間にある商品〔「膨張-収縮」〕論——金融商品（貨幣的交換ではなく貨幣間交換の発展型であるそれこそまさしくもの〈非商品〉）を含んで考える——は、吸収もすれば誘導もする。商品とは、既述7変項の包披論的な相互包摂図式「{「上部（政治、法律、イデオロギー）-下部（経済）構造」の $C_1$ 図式}—— $C_1$ 者にしろ $C_2$ 者にしろ「上部構造はない」と言い切る者は何たる者であるのか——のもとにある実装された「生産-流通-消費」の SOL における「コンステレシヨナル・マーケティング」による発生的提供物だからである。よって相互作用（交通）の関係〔性〕主義的に、「FOL 的定義下の $C_1$ -SOL 的定義下の $C_2$ 」を同時前面化する7変項

(50) Shostack, G. L., 1977, pp. 73-80.

界限でのコンセプト化を、これからのマーケティング・コンセプト化は吸収もすれば誘導もする。

「われ(われわれ)がわれわれ(われ)」になるについての「自己-他己」<sub>2</sub>は、拙稿Ⅶの記述(52~53頁)とこれを進めたものではあった拙稿Ⅴの記述(101頁)によってもさらなる進展余地があるので、倫理にも強制の強度([法的]命令, 指示, 要請, 声掛け)はあるが、これがナッジの見分けにも重要なこととして懷疑されるということである。行為の3次元を考えれば、「戦略-実践」<sub>2</sub>に拡張しうるSAP論を含むTAP論が、「理論-実践」<sub>2</sub>の「C<sub>1</sub>(C<sub>2</sub>)からC<sub>2</sub>(C<sub>1</sub>)へ」における現実を彷徨う徒な優位の察知になるものか。というのも、CC論的に考えたそうした「as(=化)論」——“as-if”論ではないが“if-then”論を含むas論は存在論である——は、少なくとも『『マクロ-ミクロ』([極]大小)の粒度』/「上下(南北)向の緯度」/「左右(東西)向の経度」/「線形分離可能な相関(因果)-線形分離不可能な相関(「自由-不自由」/「理由-原因」, 事実が判明しない過去についても当てはまるものの判明しても原因結果(因果)ではない理由成果(帰結)がある)」/「観測-操作」を祖上にのぼす諸問題の場[所]での優位性批判になるからである。「内[在/有]-外[在/有]」<sub>2</sub>をいう基本開閉論からして、「世界(言語)内存在<sup>(51)</sup>-存在内世界(言語)」にかかわり、適切な活動に合意できないという理由で生じる不活動化や大局的な戦略策定についての「組織病理」診断の肝心な場面でも、おそらく必ずや試される。

「人文<sub>2</sub>-自然<sub>2</sub>」にある社会的存在には、「無規定([非]所与の一切の概念/コード(プログラム)やこの指示対象を度外視し創造的に境界破壊する)-被規定(それらに了解的に踏み込み境界維持する)」/「コヒーレント(即自・相即・主客非分離)-デコヒーレント(対自・非相即・主客分離)」における、2種の矢印によって示す移行がある(図5)。そして意志(思)ある「存在-行為」(being-doing)が、いずれのセルにも膠着しきれず2種の矢印の移行を繰り返すほど「存在-行為」の意志(思)は放縦に自由化する。その繰り返してでは、「~への自由-~からの自由」/「積極的-消極的自由」の区分<sup>(52)</sup>とそのための「競争(働)-協調(働)」という2つながらの区分のそれぞれは、どちらもありである。

図5 「存在-行為」の自由意志

	無規定	規定
コヒーレント	↙ ↘	↗ ↖
デコヒーレント	↘ ↙	↖ ↗

ただし、それは、「自由の限界」と「平等(格差)の限界」の帰結として、どこまで可能化するのか。

何の自由か、何の平等か、そして何の公正([心的]公平)にかかわる諸構想を比較する必要は失せない。このことと地続きだが、「理性-悟性-知性」/「理論-実践」/「一定時間長で同時-推移的」とい

(51) H. L. ドレイファス/門脇俊介監訳・榊原哲也ほか訳, 2000年。ドレイファスは、自然的な語彙がないからだとハイデガーの造語を解釈して以下のように言う。個別的な人間が中心にあるという考え方になることを避けるために人間を「現存在」といい、現存在が何らかの仕方での現存在の活動への態度をとることができ、つねに何らかの仕方ですれへ態度をとっているその存在を「実存」といい、実存するという活動を「世界内存在」という。一方、ボランニーは、人間は言語コードに住むといい、実践知の精緻化の果てに暗黙知をいった。M. ボランニー/高橋勇夫訳, 2003年。なお、以下は、実践知を熟達化という学習過程において捉えようとした。Ericsson, K. A., and et al., eds., 2006, pp. 3-20. 実践的にはIT活用による進捗が現実にあるが、エリクソン以後の理論でも、暗黙知という不可知論への挑戦に成功するかは問われつづける。

(52) I. バーリン/小川晃一ほか訳, 1971年。297~390頁。

うことでの、時空間を決めている「軸化」や時空間を条件づける手摺りのような「漸近線化」として、[放恣的にすら]自由化する意志を「正／善（財，サービス）」なるものとして解放し、「形式（無限）－内容（有限）」<sub>2</sub>の踏破を促すところに、展開態（図3）の存在（有）論的意義がある。よって、正義論<sup>(53)</sup>への賛否両論を併記した「アナーキー－リヴァイアサン」の間の代替案への模索<sup>(54)</sup>の流儀が、すでに諸展開態間における縦横無尽な相互牽制に拡散しているという事態認識がなければ、それこそ大問題である。そこで、[内部環境決定を排除してまでタブーをいう]原理主義者（ストップモーションな古典的基礎づけ主義者）には理論的判断と実践的判断が一致しない場合に判断が利かない，ということには頷ける。戦略論においてもマクロ的基礎づけに対するミクロ的基礎づけも言われたこと<sup>(55)</sup>につながるわけだが，このことは包披論に向かいもする。

なお，未来が過去を変える逆向き因果への心脳知の例には，成人の門となるライオン狩りに行った若者についての「誰も知りえない成否が出る期限後」に，その若者の帰りを待つ間で行われる部族酋長の儀式踊りへの言及があった<sup>(56)</sup>。ついでに，筆者なりに「シュレージンの猫」，映画『ラ・ラ・ランド』，そして「剣道でいう『残心』の身体知」との連関も想起するが，物理学者と哲学者のコール&レスポンスにおいて時間の「非」可逆を問いながら現実（現在）を場「所」と見做す理論<sup>(57)</sup>を待っていましたとばかりに，本論以降で立ち入ることになる。

### 第3項 資源資本主義論と3層化論

選択をチョイスとしていう合理論的選択モデルと，選択をセレクションとしていう進化論的選択・淘汰モデルは，それぞれに洗練されてきた。しかも，まずもってこれらの統合として「中立」選択螺旋のSLMS化を精緻化することは，マーケティングなる研究領域が拠って立つ前提や根拠が「接近法としても」どのくらい「非」現実的であり「学際－超学」での「分離／非分離」を乗り越えられるのかを明らかにするために不可欠だと尚も考えていく。

とはいえ、「行けば分かる－分からないさ」／「行き先を間違える－間違えないさ」／「行った者を待てば分かる－分からないさ」／「行った者が来るのを待てる－待ちきれないさ」という存在論と認識論の螺旋正負化において、「決定－主意論」の2重性がますます多重性を帯びるのは，それら相互の有効期限——たとえば時計回りに西欧文化へ心酔することから日本文化を見直せば逆時計回りになること——において世界内存在が落としどころを標榜するかのような「システム－組織化」が，本論でいう3層のいずれにおいても「肯定－否定」<sub>2</sub>におけるC<sub>1</sub>かC<sub>2</sub>かへの破れ（転び）として複数に生じるからである。しかしながら，そこでの行為停止から再開するにも，つぎの対比（対立，対照）が「組織／システム」についてあることを再明示しておく。第1には「個－集団」。これには，①集合の要素に『カ

(53) J. ロールズ／矢島欽次監訳，1979年。

(54) J. M. ブキャナン／加藤寛監訳，1977年，247～268頁。

(55) Abel, P., T. Felin, T., and N. Foss, 2008. Barney, J., and T. Felin, 2013.

(56) M. ダメット／藤田晋吾訳，1986年，339～369頁。

(57) 森田邦久編著，2019年。

オスーコスモス』があるが組織のアイデンティティかつまたは組織へのアイデンティティという固有値感覚から定義される集団・団体<sup>(58)</sup>、②集合の要素に『ランダム－カオス』があるが数理統計分析上で客観的に諸属性の共通性があると判別された集合〔体〕(識別するというならば推移的に属性が把握できるクラスター)、そして③この集合の要素に『コスモス－ランダム』があるが人為的で自発的な結合であり契約論が適用できる企業等の結社(コ法人企業・会社)、がある。第2には上記について時間の「拡張／縮小」を伴う「個体－系統」。そして第3には上記の空間の「拡張／縮小」を伴う「単体－結合」。以上から成る組織の左々右(右々左)、上々下(下々上)、過々未(未々過)として内々外(外々内)という切り口の「私共－公共」/「小粒度－大粒度」の美化が期限的に生じてきた。

近代以後結合としての市民社会では、「接続(コンジャンクション)－切断(ディスジャンクション)」している何らかの「ドミナント形態」に対し、多数派が2極化する局面でも権利を基礎とする制度の安定が要求される。つぎの①や②の両極端な権利論に対し、③は中庸的なものとされた。①集団が一定目的を追求する活動に対して個人が横から待ったをかけるか制約をかける発言力を要とする権利(ノージック<sup>(59)</sup>以後のリバタリアニズム)、②効用の集計の最大化という目的追求に従属する手段としてのみ位置づけた権利(古典的功利主義者たち<sup>(60)</sup>)、③手段以上の価値があるとし達成すべき目的の一つに組み入れられるとする権利(セン<sup>(61)</sup>以後のリベラリズム)。ただし、不同意者の妥協や不同意者への強制(抑制)問題を惹起しない形態がないとなれば、すべての形態が反面では非付託者へのドミナント形態であり、周知のように民主主義もこの例外ではない。これも、絶対はないことの証である。よって、市民社会は、その中の諸組織の規範からドミナント形態〔に〕も要求し続ける——コーポラティズム(反デュアリズム)に向かうケースはある——。

そこから、市民社会の鍵とは、[超]組織の中の組織での細部意思である「私共」に対するいや私共も孕み共認不可能性さえも取り込むようにいわれている一般意思<sup>(62)</sup>として権利を要請するための、普遍化可能性に加味される公開可能性<sup>(63)</sup>に耐えうるつぎのものであるといわれた。①参加できる公共領域、②多元的な事実により相異なる妥当の論証では足りないことによる公共的正当化。ただし、あくまで少数派に対するものである寛容原理<sup>(64)</sup>、新たな承認要件を前面化するためである特定要件の公共的要件から私共的要件へのシフト化などの問題化がある。〈一般意思〉はないが「一般意思」と、エリート主義や共同体主義的共通善の普遍化につながろうといわれる卓越主義のどちらがましかの論議は終焉しているので、以下を踏まえて、その先をいう。

第1に、経済学のスミスに比肩される社会学の父による「3段階の法則<sup>(65)</sup>」がある時期に常識化したとはいえその段階化の先にあることとして、「地<sub>1</sub>－図<sub>1</sub>」と「地<sub>2</sub>－図<sub>2</sub>」の関

(58) 長谷川博, 2001年, 33～39頁。以上で言及したシステム化の進展は現今につながっている。

(59) R. ノージック/嶋津格訳, 1985年, 1989年。

(60) J. ベンサム/山下重一訳, 1979年。J. S. ミル/伊原吉之助訳, 1979年。

(61) Sen, A., 1985, pp.11-25.

(62) Zimmermann, R., 1990, 109-128.

(63) 瀧川裕英, 2006年, 28～53頁。

(64) S. メンダス/谷本光男ほか訳, 1997年。

(65) A. コント/霧生和夫訳, 1970年, 141～233頁。その後、デュルケムとウェバーの対立がある。

係をつぎのように考えるわけである。①自然の「斉一／斉同」（斉一は外延的，斉同は内包的）である「斉合」，②上記①を社会に投射したときをいうとするが社会の「整一／整序」（整一は外延的，整序は内包的）である「整合」，そして③仮説演繹的な上記①と②を異なるレベルのものとしてクロス・カップリング・接合化した「斉合（整合）なる整合（斉合）」。そこで，少なくとも，本論の3層化でいう各層（3項）は，行動／活動／営為においてナチュラルには対立はないという意味で<sup>(66)</sup>，再述するがいずれも他層があつてある。

第2には，すでに言語文法上の人称ではないといった語用上の「人称」でいえば，歴史記述とは，「1人称」的記述——ここにあるアブダクションはさて誰のもの——と数学的な「3人称」的記述——世界内存在らしからぬ者のアブダクションはさて誰のもの——があつても，その狭間にある2人称的記述（「より長く尾を引く－引かない」／「茶飯事－制度化事」）のもとにある。どこからどこまででいうのかだけでも問えない〔科学上の〕 $C_1$ 者としても水没しないようにするには，「未来が過去（2人称的記述）を〔一字一句たりとも〕変えてはいけない」との謂いを，オルテガ<sup>(67)</sup>が歴史にこそ自由意思があると喝破したのではないと言わんばかりに反芻するだけではなからう。また，自由意思とは公共的意思のことであつたとならうといわれても，その「いまここ偏重」をあつさりとなつ得するつもりはない。現存在が継承的だとしても過去を現在から既に変えてきてしまっている中で， $C_2$ （中動態など）の再帰性を浮き彫りにする科学がその先端をキープしていても，批判実在論的に対象が相であるか解であるかも問う必要がある。

第3には，より狭い専門領域上では直接的インパクトに違いがある2人の脱領域的な対論<sup>(68)</sup>でも必要視されたが明示はされなかったメタ・コードとして，この理解がないとCCは不可能であるから「0元（空）／1.5元（1なる多／多なる1）」を考えてきたのであり，「1元－2元－多元」とともに本論では今後も，こういう「大／小」なるパターン認識の自由置換を言及していく。歴史記述が揶揄されるときのとめどない帰納への歯止めとしての演繹にとって，メタ・コード（「思弁／経験」の産物）は不可欠である。ただし，理論語の発生に起源を求めるか求めないかは，どの専門領域にもある。同様に，マーケティング発達史<sup>(69)</sup>をさらに遡るか否か——たとえば，「マーケティング・コンセプト」か「三方よし」か——についても，「人文<sub>2</sub>－自然科学<sub>2</sub>」における社会科学をナッジしているところのマテリアリズムとは限らない本論以後にいう「新しい唯物論」は帰結主義である。自然科学的にもますます彫琢されてきている「0元／1.5元」のメタ・コードがないと，フェティシズムや物象化（商品の物神的性格）錯視に止まると批判されてきた負の選択螺旋に陥るような惰性態に，これからも向かいかねない。倫理は個人にとっての善であり道徳は人が人を共同体がその構成員を取り扱う際の正しさ（正義）だとし，共同体が正義に反する行為をしているときに倫理の実現が困難になるといった上で，何の平等かについて資源（機

(66) S. ジョージ／小南祐一郎・谷口真理子訳，1984（1977）年，161-235頁。以上の下向視点と後述注記のトウェイツの上向視点は，「還元／創発」が2重な現実考をトランスバクション考に突きつける。

(67) オルテガ／寺田和夫訳，2002・1953（1930）年。以上でいう「プリンス」という存在への期待があることは，「1元－2元－多元論」では説明しきれない。

(68) 廣松渉・丸山圭三郎，1985年。両者は，持論に独自の表現をもち出しながらも一致している。

(69) 猿渡敏弘，1989年，192～222頁。以上はやはり，よい理論（実践）は実践（理論）になるという発達を示唆するマーケティング史の標準のひとつである。

会費用)の平等ということも言われた<sup>(70)</sup>。本論は、標準「制度／管理」に上記すべてのメタ・コードにかかわり偏向した「不」自由／平等が謳われているかもしれないので、よくよくその再検討を要するという構えを批判的にもっている。

第4には、そうしたパターン「認識」を「生み出す／生み育てる」メカニズムがある現実プロセスとして、CC論とは異質な具体例も挙げられてはいたが、つぎには着目できる。政府セクター、民間セクターだけでは不可能な資本主義がバランスを取り戻すために、その両者のソライティーズ化により「多元セクター」(「営利-非営利」/「政府-非政府」において所有されていないすべての団体)を共同体としていう論法<sup>(71)</sup>である。そこでは既存資源を搾り取る「開拓者」に対し「探索者」をいうが、ディスカバリに対しエンカウンタをいうこととも反りが合う。また、対立を軽視して統合を強調した機能主義に陥らなければ、発生論的共生という本論でいう共同体の論法とも親和性がある。そこでこの点から、「商品経済-経済生活」/「特殊-一般」の分析が複合化するトランスペクシオン論は、「現実-非現実」/「アナログ-デジタル」におけるAI化された情報環境以後の強化仕合を「過去<sub>2</sub>-未来<sub>2</sub>」として物(モノ-もの)のみならずソーティングする流通の事実を読み解き<sup>(72)</sup>、再開することもできる。

第5には、自然科学領域でも取り扱われるようになり<sup>(73)</sup>、存在論(オントロジー)が哲学の専売特許でなくなったことは、その超長期の歴史を拭い去れるとしてのことでは決してない。同様に、資本主義論が脆弱な脱工業化社会論を越えてなされるにはやはり必要なことであるが、資本主義を「個人-社会」の資源(用在<sup>(74)</sup>)と見做し、その「超」長期の歴史に照応しようと、たとえば16-7世紀の英国資本主義以後のスペクトラム化に対してのソライティーズ化により時空拡張された資本主義論がある<sup>(75)</sup>。また、「資本家-労働者-土地所有者」/「中立-中間-作用」/「マクロ-メソ-ミクロ」に反映し始めるかたちで、資本主義の改善論もある<sup>(76)</sup>。そこで、いずれの各層も入力層、中間層、出力層になりうるという最高決定性のなさと、各層にはそれぞれの組踊りがある、という3層化を専門的に考える。「人文-自然科学」<sub>2</sub>の専門間でより先行していると判断された層はこれをまずは理解しようとされだすので、その時期での他層への言及はその先行層に牽引される分だけの脱領域(土)化をよくぞ伴う。また、専門的なSLMS化は他層を入力層と中間層にする出力層においてなされるので、本論でも第1層が入力層、第2層が中間層、そして第3層が出力層になるわけである。

第6には、信用については「内-外」<sub>2</sub>で考えC<sub>2</sub>化した資本主義精神にかかわるMMT論<sup>(77)</sup>はあるが、商取引における最重要命題といえる信頼メカニズムを脳神経科学の知見

(70) Dworkin, R. 1990, pp. 1-119. 以上に基づく。倫理と道徳の語用は、統一されていないので要注意。

(71) Mintzberg, H., 2015. 以上では以下が多元的セクターのバックボーンとなるとした。K. ポランニー／吉沢英成ほか訳, 1975年。

(72) R. ボールドウィン／遠藤真美訳, 2018 (2016)年, 221-257頁。

(73) 溝口理一郎, 人工知能学会編集, 2012年。以上は、2005年版の続編。

(74) Heidegger, M., translated by J. Macquarrie and E. Robinson, 2008 (1962).

(75) Y. コッカ／山井敏章訳, 2018 (2017)年。N. フェーガソン／柴田裕之訳, 2019 (2017)年。

(76) Kotler, P., 2015. 以上では、ピケティは所得格差のみに焦点を当てているが、分析すべき資本主義の欠点は14あるという。

により仮説検証したつぎのものがある<sup>(78)</sup>。習慣を変えるにも90日はかかるが、嘘偽りなく無防備に振る舞う「ナチュラル」な行為を強化する新しい習慣が確立するように組織文化が変われば組織の信頼レベル、職場定着率、そして生産性が上がる。こういう組織の人間はクライアントとも素早く信頼関係を構築するようになる。このとき、営業担当者の脳内ではオキシトシン（心の理論という相手になったつもりで考えること、共感力）が分泌されテストステロン（支配的行動を増やし、オキシトシンの分泌を阻害し、共感力や共同作業意欲を減退させる）の分泌が抑制されていれば、顧客側の信頼感も高まることを期待できるという仮説の正しさとともに、このことをリーダーが正確に理解すればパフォーマンスが向上することを明らかにした。だからこそ、なお一層と脳神経[生理]科学、人工知能科学、そして工学系の応用脳科学（仕組みからの機能をいうリバース・エンジニアリング）にできあがっている感情を科学化する分野や遺伝子科学、進化生物学等に基づく進化心理学における情動の生態学／進化論的なつぎの合理性論も踏まえる<sup>(79)</sup>。①「道徳－倫理」は「個体－群」にかかる自然選択（セレクション）である——これに由来する反実在論批判の道徳的実在論や進化心理学——、②性選択は社会選択（セレクション）である——ここでの社会選択は「市場－非市場（因習，独裁）」での評判に敷衍される——、③「功利－贈与」の合理選択（チョイス）と道徳選択における解の不在を倫理選択（セレクション）が補う、そして④「アイデンティティの複数性（サブパーソン）を裏打ちする「小さな心（心のモジュール）の集合体」という心の理解により進化適応的にあるという「ディーブ（深層）合理性」。

そして第7には、日本からではない構造論ではあるが構造が主体化するという構造主体説があり、こうなれば、構造は必ずあるという境界構造説や穴構造説になるだろう。しかしながら、既述のマクロ基礎づけに対するミクロ基礎づけしかり「ミクロ－マクロ」等のいかなる粒度もがプリンシパルだといわれれば、逆に、いかなる粒度もがエージェントだ<sup>(80)</sup>といいうる。そこでも、「スペクトラム－ソライティーズ」<sub>2</sub>／「コンフィギュレーション－コンステレーション」<sub>2</sub>におけるCC化として標準「制度／管理」以後のトランスベクション上のマーケティング組織個体行為への接近を再定式化するSLMS化にとっては、つぎが重要である。①地域主義の逼迫問題（多くの国家の自由貿易制度への組み入れ、各国の中でのすべての地域の発展、そしての一国多制度論）。②トランスベクションの最適化（世界最適化、その逆行）において「資本家－労働者－土地所有者」の3項化におきる変化、そして③マーケティング・チャネル論という系列化と逆系列化という「組織／システム化」に一石を投じた家電流通進化（進歩）といえる画期的事象<sup>(81)</sup>。この事象にある非対称的關係に生じた「パートナー化」では、相互に競覇への耐性を学習し合えるという非競覇原理に向かっている。その波及が他産業へ及ぶほど、「手前／手先（ロジスティ

(77) L. R. レイ／鈴木正徳訳、2019（2015）年。

(78) Zak, P. J., 2017, pp. 15-29.

(79) 田中宏和、2019年。E. A. ウィルヘルムス・V. F. レイナ編著／竹村和久・高橋英彦、2019年。J. チャロキーほか編、2005年。たとえば以上がある。

(80) J. エルスター／海野道郎訳、1997年。

(81) 以下は、まだその初期成長段階時点で言及した論稿である。長谷川博、2009年、65～91頁。

クス) - 手許 (バリューチェーン<sup>(82)</sup>) - 手先/手前 (マーケティング・チャンネル)」というトランスアクションでの考究はグローバルに深耕される。ただし、この2大原理を問うことすらできないという限界が、民主主義 (顧客主義) にはある。剰余価値概念の部分的非妥当性<sup>(83)</sup> は、「変換 - 交換」<sub>2</sub> / 「システム - 組織」<sub>2</sub> における実在的価値が如何に分配されるものであるのかへの問題提起であった。

さても、日本からの構造論を久しからずと考えるには、マーケティングなる研究領域における「競覇 - 非競覇原理」以後論がより実学的なものとしてどのくらい [非] 現実的であり「産際 - 超産」での「分離 / 非分離」を乗り越えられるのかをより明らかにする必要がある。そのために、再燃時期がある中心周縁論ではない「化」と「化×」を超えた基本開閉論 (包摂論的批判実在論) は、科学合理主義の根底にあるこれまでの C<sub>1</sub> 的な「1元論, 2元論, 多元論」と、盲点といえる C<sub>2</sub> 的な「0元論, 1.5元論」が、社会科学には不可欠であるとする。そして、さらに、われわれは CC へ向かうが、その意義は、物理についての乖離概念自体が危うい<sup>(84)</sup>、といわれたことが有力な保証になるとする。

#### [引用参考文献]

- Abel, P., T. Felin, T., and N. Foss, 2008, "Building Micro-foundations for the Routines, Capabilities, and Performance Links," *Managerial and Decision Economics*, 29(6), pp. 489-502.
- Archer, M. S. 1995, *Realist Social Theory: The Morphogenetic Approach*, Cambridge University Press. (M. S. アーチャー / 佐藤春吉訳, 2007年, 『実在論的社会理論: 形態生成論アプローチ』, 青木書店)
- Barney, J., and T. Felin, 2013, "What are Microfoundations ?" *Academy of Management Perspectives*, 27(2).
- Berger, P. L., and T. Luckmann, 1967 (1966), *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, Anchor Books (Doubleday & Company). (P. L. バーガー・T. ルックマン / 山口節郎訳, 1977 (1966)年, 『日常世界の構成: アイデンティティと社会の弁証法』, 新曜社。新訳には以下がある。2003年, 『現実の社会的構成: 知識社会学論考』, 新曜社)
- Bhaskar, R., 2015 (1979), *The Possibilities of Naturalism: A Philosophical Critique of The Contemporary Human Sciences*, 4th ed., Routledge. (R. バスカー / 式部信訳, 2006 (1998)年, 『自然主義の可能性: 現代社会科学批判』, 第3版, 晃洋書房。ただし以上は第3版の翻訳である)
- Cavalli-Sforza, L. L., and M. W. Feldman, 1981, *Cultural Transmission and Revolution: A Quantitative Approach*, Princeton University Press.
- Dworkin, R. 1990, "Foundation of Liberal Equality," reprinted in Peterson, G. B., and et

(82) Porter, M. E., 1985. 以上でいう定義に基づく語用。

(83) 森嶋通夫, 2004 (1973)年。

(84) 上田皖亮ほか, 1999年, 3~59頁。

- al., eds., *The Tanner Lectures on Human Values XI*, University of Utah Press, pp. 1-119.
- Ehring, D., 2011, *Tropes: Properties, Objects, and Mental Causation*, Oxford University Press.
- Ericsson, K. A., and et al., eds., 2006, *The Cambridge Handbook of Expertise and Expert Performance*, 2nd ed., Cambridge University Press.
- Heidegger, M., translated by J. Macquarrie and E. Robinson, 2008 (1962), *Being and Time*, Harperperennial and Modernthought. (M. ハイデガー／熊野純彦訳, 2013年, 『存在と時間』, 岩波書店)
- Hunt, S. D., 1995, "The Resource-Advantage Theory of Competition: Toward Explaining Productivity And Economic Growth," *Journal of Management Inquiry*, 4(4), pp. 317-332.
- Hunt, S. D., 1997(a), "The Resource-Advantage Theory of Competition: An Evolutionary Theory of Competitive Firm Behavior," *Journal of Economic Issue*, 31(1), pp. 59-77.
- Hunt, S. D., 1997(b), "Evolutionary Economics, Endogenous Growth Model, and Resource-Advantage Theory," *Eastern Economic Journal*, 23, issue 4, pp. 425-439.
- Jackson, M. C., 2005, *Systems Thinking: Creative Holism for Managers*, John Wiley & Sons.
- Kotler, P., 2015, *Confronting Capitalism: Real Solutions for a Troubled Economic System*, AMACOM.
- Mintzberg, H., 2015, *Rebalancing Society: Radical Renewal Beyond Left, Right, and Center*, Berrett-Koehler Publishers.
- Moore, M. L., D. Riddel and D. Vocisano, 2015, "Scaling Out, Scaling Up, Scaling Deep: Strategies of Nonprofits in Advancing Systemic Social Innovation," *Journal of Corporate Citizenship*, 58, pp. 67-84.
- Porter, M. E., 1985, *Competitive Advantage : Creating and Sustaining Superior Performance*, Free Press. (M. E. ポーター／土岐坤訳, 1985年, 『競争優位の戦略：いかに好業績を持続させるか』, ダイヤモンド社)
- Sen, A., 1985, *Commodities and Capabilities*, Elsevier Science Publishers B. V., pp. 11-25. (A. セン／鈴木興太郎訳, 1988年, 『福祉の経済学』, 岩波書店)
- Shostack, G. L., 1977, "Breaking Free from Product Marketing," *Journal of Marketing*, 41(2), pp. 73-80.
- Zak, P. J., 2019, "How Our Brains Decide When to Trust," *Harvard Business Review*, July-Aug, 18. (辻仁子訳, 2019年, 「神経科学が解き明かす信頼のメカニズム」『DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー』12月号, pp. 48~53頁)
- Zak, P. J., 2017, *Trust Factor: The Science of Creating High-Performance Companies*, AMACOM. (白川部君江訳, 2017年, 『トラスト・ファクター：最強の組織をつくる新しいマネジメント』, キノブックス)
- Zimmermann, R., 1990, "Equality, Political Order and Ethics: Hobbes and the Systematic of Democratic Rationality," *Universalism vs. Communitarianism: Contemporary Debates in Ethics*, edited by David Rasmussen, pp. 109-128.

- A. コント／霧生和夫訳, 1970年, 「実証精神論」, 『世界の名著36 コント スペンサー』中央公論社。
- A. スミス／高哲男訳, 2013(1790)年, 『道徳感情論』, 講談社。
- A. ダマシオ／高橋洋訳, 2019年, 『進化の意外な順序:感情,意識,創造性と文化の起源』, 白揚社。
- A. ギデンス／松尾精文ほか訳, 1987(1976)年, 『社会学の新しい方法規準』, 而立書房。
- A. ギデンス／宮島喬ほか訳, 1986(1977)年, 『社会理論の現代像』, みすず書房。
- B. アンダーソン／白石隆・白石さや訳, 2007年, 『定本 想像の共同体:ナショナリズムの起源と流行』, 書籍工房早山。
- Ch. テイラー／田中智彦訳, 1994年, 「アトミズム」, 『現代思想』, 22(4), 193~215頁。
- C. M. ビショップ／元田浩ほか訳, 2012年, 『パターン認識と機械学習(上下):ベイズ理論による統計的予測』, 丸善出版。
- D. ルイス／佐金武ほか訳, 2016年, 『世界の複数性について』, 名古屋大学出版会。
- E. デュルケム／菊谷和宏訳, 2018(1895)年, 『社会学的方法の規準』, 講談社。
- E. レビナス／会田正人訳, 1999(1974)年, 『存在の彼方へ』, 講談社。
- E. A. ウィルヘルムス・V. F. レイナ編著／竹村和久・高橋英彦監訳, 2019年, 『神経経済学と意思決定』, 北大路書房。
- E. F. シューマッハー／酒井懋訳, 1986年, 『スモール・イズ・ビューティフル』, 筑摩書房。
- E. F. シューマッハー／酒井懋訳, 2000年, 『スモール・イズ・ビューティフル再論』, 筑摩書房。
- E. M. ウッド／石堂清倫監訳／森川辰文訳, 1999年, 『民主主義 対 資本主義:史的唯物論の革新』, 論創社。
- F. A. ハイエク／八木紀一郎監訳／中山智香子・太子堂正純・吉野裕介訳, 2009年, 『思想史論集』, 春秋社。
- G. アガンベン／高桑知己訳, 2003年, 『ホモ・サケル:主権権力と剥き出しの生』, 以文社。
- G. シモンドン／藤井千佳世監訳／近藤和敬ほか訳, 2018年, 『個体化の哲学:形相と情報の概念を手がかりに』, 法政大学出版局。
- G. ドゥルーズ・F. ガタリ／市倉宏祐訳, 1986年, 『アンチ・オイディプス:資本主義と分裂病』, 河出書房新社。
- H. ウルリッヒ・G. J. B. プロプスト／徳安彰訳, 1992年, 『自己組織化とマネジメント』, 東海大学出版会。
- H. L. ドレイファス／門脇俊介監訳・榊原哲也ほか訳, 2000年, 『世界内存在:「存在と時間」における日常性の解釈学』, 産業図書。
- H. ドレイファス・Ch. テイラー／村田純一監訳, 2016年, 『実在論を立て直す』, 法政大学出版会。
- H. スペンサー／
- I. カント／篠田英雄訳, 1964年, 『判断力批判(上下)』, 岩波書店。
- I. カント／篠田英雄訳, 1961年, 1962年, 『純粹理性批判(上中下)』, 岩波書店。
- I. カント／波多野精一ほか訳, 1979年, 『実践理性批判』, 岩波書店。I. バーリン／小川晃一ほか訳, 1971年, 『自由論』, みすず書房。

- J. エイチスン／今井邦彦訳, 1999 (1996) 年, 『ことば 始まりと進化の謎を解く』, 新曜社。
- J. エルスター／海野道郎訳, 1997 年, 『社会科学の道具箱：合理的選択理論入門』, ハーベスト社。
- J. エルスター／染谷昌義訳, 2008 年, 『合理性を圧倒する感情』, 勁草書房。
- J. オルテガ／寺田和夫訳, 2002 年, 『大衆の反逆』, 中央公論新社。
- J. コッカ／山井敏章訳, 2018 年, 『資本主義の歴史：起源・拡大・現在』, 人文書院。
- J. チャロキーほか編／中里浩明ほか訳, 2005 年, 『エモーショナル・インテリジェンス：日常生活における情動機能の科学的研究』, ナカニシヤ出版。
- J. バトラー／佐藤嘉幸・清水知子訳, 2019 (2015) 年, 『「ジェンダー・トラブル」からアセンブリへ』, 青土社。
- J. バトラー／佐藤嘉幸・清水知子訳, 2018 (2015) 年, 『アセンブリ：行為遂行性・複数性・政治』, 青土社。
- J. ベンサム／山下重一訳, 1979 年, 「道徳および立法の諸原理序説」, 関嘉彦責任編集『ベンサム J. S. ミル』, 中央公論新社。
- J. ロールズ／矢島欽次ほか訳, 1979 年, 『正義論』, 紀伊國屋書店。
- J. ロールズ／E. ケリー編／田中成明ほか訳, 2004 年, 『公正としての正義 再説』, 岩波書店。
- J.G. マーチ・J. P. オルセン／遠田雄志・A. ユング／訳, 1986 年, 『組織におけるあいまいさと決定』, 有斐閣。
- J=L. ナンシー／西谷修ほか訳, 2001 年, 『無為の共同体：哲学を問い直す分有の思考』, 以文社。
- J. M. ブキャナン／加藤寛監訳, 1977 年, 『自由の限界：人間と制度の経済学』, 秀潤社。
- J. S. ミル／伊原吉之助訳, 1979 年, 「功利主義論」, 関嘉彦責任編集, 『ベンサム J. S. ミル』, 459～528 頁。
- K. ゲーデル／戸田山和久訳, 1995 年, 「ラッセルの数理論理学」, 飯田隆編監訳, 『数学の哲学 ゲーデル以後』 勁草書房。
- K. ポランニー／吉沢英成ほか訳, 1975 年, 『大転換：市場社会の形成と崩壊』, 東洋経済新報社。
- K. J. ガーゲン／東村知子訳, 2004 年, 『あなたへの社会構成主義』, ナカニシヤ出版。
- K. R. ポパー／小河原誠・内田詔夫訳, 『開かれた社会とその敵 第1部プラトンの呪文 第2部予言の大潮』, 1980 年, 未来社。
- L. フォイエルバッハ／船山信一訳, 1955 年, 『唯心論と唯物論』, 岩波書店。
- L. ボルトンスキー・E. シャベロ／三浦直希ほか訳, 2013 (1999) 年, 『資本主義の新たな精神 上下』, ナカニシヤ出版。
- L. R. レイ／鈴木正徳訳, 2019 (2015) 年, 『MMT 現代貨幣理論入門』, 東洋経済新報社。
- M. ウェバー／富永祐治ほか訳, 1954 (1949) 年, 『社会科学方法論』, 岩波書店。
- M. オークショット／嶋津格ほか訳, 1988 年, 『[増補版] 政治における合理主義』, 勁草書房。
- M. ダメット／藤田晋吾訳, 1986 年, 『真理という謎』, 勁草書房。
- M. ブランショ／西谷修訳, 1997 年, 『明かしえぬ共同体』, 筑摩書房。
- M. ポランニー／高橋勇夫訳, 2003 年, 『暗黙知の次元』, 筑摩書房。

- M. J. サンデル／菊池理夫訳, 1992年, 『自由主義と限界』, 三嶺書房。
- N. ファーガソン／柴田裕之訳, 2019 (2017)年, 『スクエア・アンド・タワー (上下)』, 東洋経済新報社。
- P. L. バーガー・T. ルックマン／山口節郎訳, 2003年, 『現実の社会的構成：知識社会学論考』, 新曜社。
- P. チェックランド／高原康彦・中野文平監訳, 1985年, 『新しいシステムアプローチ：システム思考とシステム実践』, オーム社。
- Q. メイヤスー／千葉雅也ほか訳, 2016年, 『有限性の後で：偶然性の必然性についての試論』, 人文書院。
- R. カーツワイル／井上健監訳, 2007年, 『ポスト・ヒューマン誕生：コンピュータが人類の知性を超えるとき』, NHK出版。
- R. ドゥオーキン／高橋秀治訳, 1994年, 「リベラルな共同体」, 『現代思想』, 22 (4), 116～137頁。
- R. ノージック／嶋津格訳, 1985,1989年, 『アナキー・国家・ユートピア (上下)』, 木鐸社。
- R. ボールドウィン／遠藤真美訳, 2018 (2016)年, 『世界経済大いなる収斂』, 日本経済新聞出版社。
- R. ローティ／室井尚ほか訳, 2014年, 『プラグマティズムの帰結』, 筑摩書房。
- R. B. グッドマン／嘉指信雄ほか訳, 2017 (2002)年, 『ウィトゲンシュタインとウィリアム・ジェイムズ：プラグマティズムの水脈』, 岩波書店。
- R. H. フランク／山岸俊男監訳, 1995年, 『オデッセウスの鎖：適応プログラムとしての感情』, サイエンス社。
- S. ジョージ／小南祐一郎・谷口真理子訳, 1984 (1977)年, 『なぜ世界の半分が飢えるのか：食料危機の構造』, 朝日新聞社。
- S. メンダス／谷本光男ほか訳, 1997 (1989)年, 『寛容と自由主義の限界』, ナカニシヤ出版。
- T. P. アロウェイ・R. G. アロウェイ編著／湯澤正通・湯澤美紀監訳, 2015年, 『ワーキングメモリと日常：人生を切り拓く新しい知性』, 北大路書房。
- U. ベック／山本啓訳, 『世界リスク社会』, 法政大学出版局。
- Y. コッカ／山井敏章訳, 2018 (2017)年, 『資本主義の歴史：起源・拡大・現在』, 人文書院。
- 石田英敬・吉見俊哉・M. フェザーストーン編, 2015年, 『デジタル・スタディーズ 2 メディア表象』, 東京大学出版会。
- 一ノ瀬正樹, 2006年, 『原因と理由の迷宮：「なぜならば」の哲学』, 勁草書房。
- 井上達夫, 1999年, 『他者への自由：公共性の哲学としてのリベラリズム』, 創文社。
- 井上達夫, 2006年, 『公共性の法哲学』, ナカニシヤ出版。
- 上田院亮ほか, 1999年, 『複雑系を超えて：カオス発見から未来へ』, 筑摩書房。
- 宇野弘蔵, 1964年, 『経済原論』, 岩波書店。
- 大内力, 1970年, 『国家独占資本主義』, 東京大学出版会。
- 大阪大学ショセキプロジェクト, 2019年, 『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』, 大

- 阪大学出版会。
- 猿渡敏弘，1989年，「マーケティング発達史」，『新現代マーケティング入門』，実教出版，192～222頁。
- 瀧川裕英，2006年，「公共性のテスト：普遍化可能性から公開可能性へ」，井上達夫編『公共性の法哲学』，28～53頁。
- 田中宏和，2019年，『計算論的神経科学』，森北出版。
- 長谷川博，2001年，「企業グループ経営とマーケティング：組織集合体共生とネットワーク型関係拡張」『企業診断』，48(9)，33～39頁。
- 長谷川博，2009年，「家電流通の進化：第1期・過渡期・第2期」，『千葉商大論叢』，47(1)，65～91頁。
- 廣松渉・丸山圭三郎，1985年，「文化のフェティシズムと物象化」，『思想』，岩波書店。
- 藤田和生編，2007年，『感情科学』，京都大学学術出版会。
- 丸山圭三郎，1984年，『文化のフェティシズム』，勁草書房。
- 丸山圭三郎・廣松渉，1993年，『記号的世界と物象化』，情況出版。
- 溝口理一郎，人工知能学会編集，2012年，『オントロジー工学の理論と実践』，オーム社。
- 森嶋通夫／高須賀義博訳，2004(1973)年，『森嶋通夫著作集7 マルクスの経済学：価値と成長の二重の理論』，岩波書店。
- 森田邦久編著，2019年，『〈現在〉という謎：時間の空間化批判』，勁草書房。
- 渡辺慧，1978年，『認識とパタン』，岩波書店。

(2020.8.17 受稿，2020.10.27 受理)